

新装版

# 終電へ三〇歩

帰れない夜の殺人

赤川次郎

*Jiro Akagawa*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。



## 目次

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
奇妙な平和	非行	選択	眠りの後	迷路	流血	焦り	スポットライト	乾いた心	迷い道	いつもの夜
88	80	72	64	56	48	40	33	25	17	9
<hr/>										
22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
付合い	さすらう死体	心変り	暗い沼	風向き	奇妙な朝	発作	幻の映像	職人芸	脱走	たてこんだ部屋
173	165	157	149	142	134	126	118	110	103	96
<hr/>										
	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
	新しい明日	事故	明と暗	罪から罪へ	闇の奥へ	ときめき	憎しみ	木枯し	訪問客	名演技
	252	244	236	229	221	213	205	197	189	181

## 登場人物紹介

柴田秀直 係長止まりのサラリーマン、四十六歳。

柴田沙紀 柴田の妻。

柴田幸代 柴田の娘。私立女子校に通う中学二年生。

永井絢子 課長、四十二歳。柴田の直属の上司。

黒木昭平 柴田の会社の常務。絢子と不倫している。

黒木郁代 黒木の妻で、馬淵社長の姪。

黒木美央 黒木の娘。十七歳の高校生。

三神久士 テレビ番組制作会社の社長。

三神真世 三神の妻。元女優、結婚と同時に引退。四十五歳。

三神 彩 私立の名門女子高校に通う二年生。演劇部。

常田広吉 三神の元同僚。クビ切りにあい、酒に溺れる。

常田加代子 常田の妻。バー〈K〉を営む。四十八歳。

常田 治 常田の息子。都立高校に通う二年生。演劇部。

ルミ 加代子のバー〈K〉の新人ホステス。

安田圭子 専業主婦、四十歳。夫からDVを受ける。

安田浩次

圭子の夫。三十六歳。

安田 結

圭子の娘。小学一年生。

西川あゆみ

圭子の元同僚、四十二歳。独身。

本多

ごく平凡なサラリーマン。離婚して十年。

織原しのぶ

女優。常田とは新人の頃からの知り合い。

木下

しのぶのマネージャー。

桑原央之

シナリオライター。しのぶの恋人。

桑原信子

桑原の妻。夫同様、不倫している。

桑原拓郎

桑原の息子。八歳。

マイケル

金髪の若者。幸代の恋人で、父は市会議員。

香月 杏

十七歳の高校生。マイケルの従妹。

哲

失業中の元自動車修理工。

文弥

哲の弟分。

馬淵

柴田、黒木、絢子が勤める会社の社長。

松木奈美

バー〈R〉のママ。

内村

くたびれた中年男。奈美に金を貸している。

乙羽香子

奈美の年の離れた妹。看護師。



終電へ三〇歩  
帰れない夜の殺人





## 1 いつもの夜

いつもなら。

そう。——いつもなら、そのひと言は思いやりだった。

「もう帰らないと、終電に間に合わないわよ」  
その飲み屋は、女将おかみの「お袋の味」が人気だった。

むろん、一人でやっている店だから、大したつまみは出ないのだが、どれもなかなか旨い。少し塩味が強いが、女将が東北出身だから、という話だった。

ただし、本当に東北の出身なのか、当地人の口から聞いたという客はいなかったが。

「もうそんな時間か……」

少しもつれた舌で、立ち上あがったもう一人の客が、「じゃ、母さん、またね！」

「毎度」

と、女将は言って、「あんたはいいの？」

と、柴田しばたの方へ顔を向けた。

「ああ……。行くよ」

酔えない。ちつとも、体が熱くさえならない。風が冷たいせいだけではない。忘れたいことが多過ぎるせいだけでもない。

何もかもが——自分を取り巻く何もかもが、冷た過ぎて柴田の体を中身から、芯から凍らせているのだ。

その氷の塊は、少々のアルコールぐらいでは解けない。

「いくらだい……」

柴田は上着の内ポケットから財布を取り出し

た。

「いいわよ、月給日で」

と、女将は手を振って、「寒いよ。風邪ひかないようにね」

「ああ……。だけど……」

その後を続けるべきかどうか、柴田は迷った。もう月給日は来ないんだよ。母さん、もう俺には。

だから、今日は払ってくよ。そうでないと、「次」はもうないかもしれないからさ……。

「さ、早く行った！」

と、柴田は押し出されてしまった。「駅のベシチで寝たら死ぬよ」

まあ、都会のことで、それほど寒くはないが、心配してくれるのは嬉しかった。そんな女将に損をさせちゃいけない、と思いつながら、結局柴

田は今日の分を払わずに歩き出していったのだ……。

駅までは大した距離ではない。

柴田秀直ひでなおは、重い足どりで歩いていった。

小さな飲み屋の並ぶ、駅前の細い通り。

同じく、「終電に間に合うように」駅へと向かう男たちがいくらかもいる。

どんなに酔っていても、必ず「終電」には乗って帰る。——その悲しい習性は、まるで日暮れに牛小屋へ戻る牛たちのような……。

柴田秀直は四十六歳。——優秀で、素直で、という親の期待が一見して分る名前。

そんな自分の名が嫌いだった。

それでも、一応しっかりした企業で二十三年。課長にはなっていないが、その下の係長のポス

トで五年。

「そろそろ課長か……」

と、自分でも思い始めていたところへ、リス  
トラの嵐。

会社は他の大企業の子会社になり、人員を三  
割減らすことになったのだ。その中に、柴田の  
名もあつた……。

優秀で素直な柴田の名も。

通告されたのは、わずか二週間前。そして今  
日が最後の出勤である。

飲んでも酔えないのは当然だろう。  
わずかばかりの退職金は出た。しかし、次の  
仕事を見付けるまでの生活を支えられるかどう  
か。

北風は、いつも以上に冷たい。

正面から吹いてくる風に、つい顔をそむけた

拍子だった。

ちょうど脇へ入る道があり、少し先にポツと  
明るく見えるのは、いささかさびれた感じのラ  
ブホテルの入口。——今、そこから男と女が出  
て来たところだ。

柴田は足を止めた。夜のこと、顔ははつき  
り分らないが、しかし長いこと毎日見て来た二  
人だ。

あいつら……。本当に？

その二人はホテルを出て来ると、柴田の方へ  
背を向けて歩き出した。柴田は何も考えずに、  
その後をつけて行つた……。

男は、柴田が所属していた部署を担当する常  
務、黒木くろぎ。そして女は——。

「あいつが……。黒木常務と。そついうことか」  
永井ながい 絢子あやこは、柴田の直接の上司だった。年齢

は柴田より四つ若い、四十二歳だが、二年前、課長として他の部からやって来た。

確かに仕事はできるのだろう。その代り、部下に厳しいことでは、男性の社員を泣かせるのが年中である。

独身で、一人暮しと聞いていた。男の気配など、みじんもなかったのに……。

その永井絢子が、黒木とホテルへ？

むろん、黒木には妻子がある。というより、

今の社長の姪が、黒木の妻だ。

これが知れたら……。

「どこに行くんだ？」

と、柴田は呟いた。

小さな公園があった。もちろん、夜だから誰もいない。

黒木と永井絢子は、公園のベンチに腰をおろ

した。

公園には柵はないので、柴田は植込みの間を進んで、二人のかけるベンチの斜め後ろに出た。二人の着ているコートがガサガサと音をたて、抱き合い、唇を重ねているのが、うす明りに見える。

柴田は、このときになって、初めて気付いた。

——今、俺は自分にとって絶好のネタをつかんでいるのだ。

黒木は、浮気を妻に知られたくないだろう。

その相手の永井絢子だって。

直接の上司の課長と、その上の常務。

その二人の弱味を握ったのだ。

俺を、どこかのポストに戻すぐらいのことはしてもらってもいいだろう。口をつぐんでいる代償に……。

「——もう行つて」

と、永井絢子が言った。「終電に間に合わなくなるわ」

その声を聞いて、柴田は思わず口もとに笑みを浮かべた。

永井絢子のあんな声を会社で聞いたことがなかったからだ。いつも、とげのあるきつい声で人を叱りつけている女が……。

あんな声も出るんだな。

「そうだな……。もつと一緒にいたいけど」

「じゃ、どこかに泊つてく？」

と、永井絢子に訊かれて、黒木は少しあわてたようだ。

「いや、それはちよつと……」

「冗談よ」

と、絢子は笑つて、「さあ、行つて」

「うん」

黒木は立ち上つて、「じゃ、先に行くよ」

「ええ。——ネクタイ、ちゃんと真直ぐにしてね。奥さんが気が付くわ」

「あいつが、そんなことに気が付くもんか。じゃ」

黒木が足早に公園を出て行く。

柴田も、本当ならもう行かないと、終電に間に合わない。しかし、今、目の前にいる永井絢子にひと言、言つてやりたかった。

それに——終電で帰ったところで、待つているのは、暗く寝静まった部屋だけだ。

妻の沙紀さきも、娘の幸代さちよもぐっすり眠っている。

柴田が今日で「失業者」になったことなど知らずに……。

そうだ。——黒木常務に、永井絢子から話を

させよう。

それぐらいのことはしてもらってもいいはずだ。二十年以上働いて、あんなにも冷たくお払い箱にされたのだから……。

柴田は植込みのかけから出て行くこうとした。そのとき——思ってもみないことが起った。

永井絢子が、両手で顔を覆って泣き出したのである。声を上げ、しゃくり上げながら、呻くように、身をよじらんばかりにして、泣いていたのだ。

その場に立ったまま、柴田はどうすることもならず、泣いている永井絢子を見ていた。

急に冷たい水を浴びせられたようだった。

黒木にとって、ただの浮気でも、永井絢子にとってはそれ以上のものなのだろう。柴田は、この課長がごく普通の人間だったということに、

初めて気付いた。

どれくらい泣いていただろう。

もう終電は出てしまったに違いない。

しかし、柴田は泣いている永井絢子に声をかける気には、どうしてもなれなかった……。

——ハンカチを出して、顔を拭くと、永井絢子はやっと息をつき、背筋を伸して立ち上った。そのとき、初めて人の気配に気付いた。

振り向いて、

「誰？」

と、少し怯えたような声を出す。

柴田が進み出ると、永井絢子は幻でも見たように、

「柴田さん？」

と言った。「——どうして、ここに？」

「見かけたんだ、たまたま」

と、柴田は言った。「君たちがホテルから出て来るところを」

「そう……」

絢子はハンカチでもう一度涙を拭うと、「隠れて見てたのね」

「まあね」

「いい気味だと思ってるでしょ」

「いや……。初めは、いいものを見たと思ったよ。何しろ、常務が相手だよ」

絢子は目を伏せて、

「私が悪いのよ」

と言った。「黒木さんは気の弱い人だよ」

「分ってる」

絢子はハッとしたりするように、

「まさか——黒木さんの奥様に知らせたりしないわね。お願いよ、それだけはやめて」

「どうして僕が黒木常務に気をつかわなきゃいけないんだ？ 社員でもないのに」

と、柴田は言い返した。

「あなたの気持は……」

「分るもんか。帰って女房に何と話せばいいのかわかんないよ。苦しんでる男の気持なんて」

「私も……何とかあなたの名前がリストに入るのを止めたかった」

「本当かい？ まあ、今となってはどうでもいい」

「柴田さん——」

「脅迫してやろうと思ったよ。君らの仲を黙っている代りに、復讐させろって」

「それは別の問題だよ」

「そんなこと、言ってられるかい？ 明日から、どうやって食べていくか、見当もつかないとき

に」

と、柴田は言つて、「しかし——今、君が泣くを見て、やめたよ」

「私に同情したの？」

「同情はしないが、泣いてる女の弱味につけ込むような卑劣な人間にまで墮ちたくない、と思つたんだ」

「それじゃ……」

「見なかつたことにするよ、君らのことは」

柴田は肩をすくめて、「もう終電は行つたな。

君は帰らないの？」

「私は駅前の駐車場に車を置いてるの」

「そうか。——そういえば、どこに君が住んでるかも知らなかつたな」

「あなたのお宅と近いわ。車で送るわよ」

「いや、何とか……。タクシーはもつたいない

から、どこか安い所に泊つて、明日帰るさ。一円だつて、むだづかいできない」

「それぐらいのこと、させて」

と、絢子は言つた。「せめてものお詫びだわ」

「だが……」

と、ためらつたが、「じゃ、そうさせてもらおう。歩いて帰るわけにもいかないしな。だが、僕は飲んでるから、運転できないよ」

「大丈夫。運転には自信があるの」

二人は公園を出て、歩き出した。

「駅から少し離れてるから、料金が安いのに」

駐車場には、目立たない小型車が停とまつていた。絢子がキーを出して車のドアを開けたときだつた。

「すみません……」

という声にびっくりして、二人が振り向くと、



ブレザーの制服の、高校生らしい男の子と女の子がいつの間にかすぐそばに立っていたのである。

## 2 迷い道

柴田は、一瞬その二人が幻かと思った。

どう考えても、高校生がこんな時間に、こんな場所にいるのは不自然だったからだ。

しかし、ここで幽霊と出会うわけもないし……。

「何か用？」

と、永井絢子が二人に訊いた。

駐車場の薄暗い照明の下、その男の子と女の子は、いかにも心細げに見えた。

「あの……」

と言いかけたのは男の子だったが、その先の言葉が出て来ない。

女の子が、意を決したように、  
「お願いがあるんです」

と言った。

「何かしら？」

「あの……お金を貸して下さい」

と、女の子は言った。

柴田と絢子は顔を見合せた。

その少年と少女は、学生鞆をさげて、どう見ても学校帰りという感じ。そして、どちらもごく普通の高校生にしか見えない。

「あなたたち、高校生？」

と、絢子が訊いた。

「はい」

と、男の子が肯く。うなず「二年生です」

「二人とも？　じゃ、十七歳？」

二人が肯く。

「でも——どうしてこんな所にいるの？」

二人がチラッと目を合せて、

「二人で……一緒にいたくて」

と、女の子が言った。「私、この人が好きなんです」

二人の手が互いを求め合うように、握り合った。

「そう……。でも、お金を借りて、どうするつもり？」

女の子がちよつと目を伏せて、

「貸して下さいって言いましたけど……。たぶんお返しできないと思います」

と言った。「二人で、どこか遠くへ行きたいんです」

「遠くへ、ね……」

「いくらでもいいんです。——電車賃さえあれば」

と、男の子が言った。

「しかし、もう終電に間に合わないよ」

と、柴田は言った。

二人は当惑した様子で、

「本当ですか」

「じゃあ……始発まで待ちます」

「ちよつと待って」

と、絢子は言った。「あなたたち、二人で駆け落ちしようってわけ？　十七歳で？」

「はい」

と、女の子が肯く。「私たち、本気です」

確かに、本気には違いないだろう。しかし大人が、こんな無茶を手助けするわけにはいかな

い……。

「——考え直して」

と、絢子は言った。「ね、まだそんなことするには、二人とも若過ぎるわ」

二人は、顔を見合せると、

「すみませんでした」

「お邪魔しました」

と、頭を下げて、立ち去ろうとした。

手をつないで歩いて行く二人の後ろ姿を見送っていた柴田は、

「君たち！」

と、呼び止めた。

二人が振り向く。

「君たち……死ぬつもりじゃないのか」

と、柴田は言った。

二人はチラッと目を合せた。

「——分りません」

と、女の子は言った。「どうなるのか、私たちにも。でも、死ぬしかなかったら、そうするかもしれない」

柴田は、絢子と顔を見合せた。

「まあ、ともかく落ちつけよ」

と、柴田は言った。「時間はあるんだろ？少し話をしないか？」

それは眠気だったのかどうか、圭子けいこには分らなかった。

ただ、疲れて頭がしびれているような気分だったのかもしれない。

それとも、そのカラオケスナックの空気が悪くて、酸欠状態になっていたのかもしれない。た。

ともかく、頭がボーッとして、何も考えられなかったことは事実だったのである。

ふっと我に返ったのは、客の女性の誰かが歌った、古いヒット曲のせいだった。

「こんにちは、赤ちゃん」

へえ……。こんな昔の歌を歌う人っているんだ。

圭子だって、一応知ってはいるが、まず自分で歌うことはない。

いや、もともと、安田<sup>やすだ</sup>圭子はカラオケというものが好きでないのだ。

でも……。

「あ……。今、何時？」

と、圭子は隣で水割りを飲んでいる西川<sup>にしがわ</sup>あゆみに訊いた。

自分で腕時計を見ればいいことなのだが、西

川あゆみに対して、

「私、もう帰らなきゃ」

と、アピールする意味もあった。

「何言ってるの」

と、西川あゆみは言った。「今夜は帰らないんでしょ。そう言ったじゃないの」

「え？ 私、そんなこと言った？」

「言ったわよ。だからここに腰を落ちつけてるんじゃない」

「待ってよ。私——そんなこと言ってない。ただ……酔っ払ってたのよ」

と、圭子は言った。「結<sup>ゆい</sup>が待ってるもの。帰らないと」

「だめだめ。——帰って、また旦那に殴られるの？」

スツと、酔いが覚めていく。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。